新しい国民的共同へ

対話重ね一致点大切に

安保法制のとき私は、「安全保障関連法に反対する医療・介護・福祉関係者の会」（略称＝医療・介護・福祉の会）の共同代表として国会前で抗議の声をあげました。「医療や介護、福祉は戦争のない平和社会であってこそ」の一致点による立場の違いを超えた共同でした。その経験は介護分野では、介護当事者や家族、事業者、市民、労組が幅広く結集し介護改悪に反対した「介護7団体」の取り組みに結びつきました。

NPO法人暮らしネット・えん代表理事
「ケア社会をつくる会」世話人
小島 美里さん

またこれらは、介護危機に立ち上がり院内集会を断続的に開いて介護改悪を押しとどめてきた、立場を超えた多様な人々が情報を共有する「ケア社会をつくる会」へと発展しています。

同会では参院選前に院内集会を開き、訪問介護基本報酬の引き下げ撤回を求め、利用料2割負担の拡大やケアプラン有料化、要介護1・2の「生活援助」の保険外しなどの改悪に反対の声を上げています。この院内集会にははじめて自公も参加しました。

参院選挙では自公政権にノーが突きつけられる一方、社会保障の切り下げを主張し、右翼・排外主義の色彩が濃い党派が伸長しました。しかし中心にいる人は別にして、これらに投票した多くの人々は本来、先の見えない社会にいら立ち、社会保障予算の削減、雇用の非正規化など新自由主義の政治に痛めつけられた人たちです。それにノーなら、リベラルや左翼を支持しても良いはずなのにそうならなかった。言葉が届いていない。それはなぜか、よく考える必要があります。彼らをリスペクトして同じ目線に立って、対話を重ねることから始めるほかないでしょう。

日本は岐路に立っています。運動は大きな一致点を大切に小さな違いは脇において進めていくことです。軍拡に反対、社会保障を守れ。絶対に、あきらめることはできません。